



河内潟の時代の大阪平野と主な弥生時代遺跡(約3000～2000年前の復元図)

中垣内遺跡

(その三)

今から約七千年前、大阪平野には、河内湾と呼ばれ、海が深く入り込んでいました。その後、河内湾は、土砂などが積もってどんどん埋められて、河内潟、河内湖と姿を変え、今日の大河内湾になりました。

前期の集落が営まれたところは、ちょうど河内潟の時代にあたり、その海岸線を復元すると図のようになります。本流域のほとんどの水が覆われていました。北向きに角のよう飛び出している半島が大阪城のある上町台地です。

潟の周辺では、中垣内遺跡のほかにも各地で集落が営まれていたことがわかっています。このような場所は、水辺に広がる低湿地を利用した水田農耕に適しているほか、潟からとれる魚貝類も豊富だったことでしょう。水上交通によって他の集落へ移動するのにも便利でした。

中垣内遺跡は、このような条件が、満たされたからこそ弥生時代の早い時期に、集落が営まれたと言えるでしょう。

中垣内遺跡

(その四)

昭和六十二年七月から十月に、大阪産業大学構内で発掘調査が行われ、地表下約四・三メートルの深さから、掘立柱建物や竪穴式住居などの遺構が検出されました。



中垣内遺跡から出土した直弧文彫り木製品

出土した土器から、古墳時代前期のものと考えられ、これまで弥生時代の集落として知られていた中垣内遺跡が、古墳時代になっても、集落が営まれていたことがわかる貴重な発見でした。

大量の土器のほかにも、素文鏡（直径約二センチの銅で作られた鏡で、実際に姿を写す鏡ではありません）、直弧文彫り木製品（長さ約二十センチ、幅約十七センチの板に直線と曲線を彫り刻んだもので、どのように使われたかは不明）、骨製根ばさみ（矢の一部分で、矢じりを矢柄に固定する道具）、管玉など珍しい遺物が出土しています。これらは、日常使われたものではなく、何か特別な祭祀の時（稲の収穫を祝うとか、悪霊を追い払うなど）に限って使われていたのではないかと思います。

祭祀に関係の深いこのような遺物が、集落跡から出土したことは、当時の人々の生活様式を考えるうえで、大変貴重な資料と言えるでしょう。